

埋文えひめ

(第15号) 平成3年10月

編集・発行財団法人愛媛県埋蔵文化財調査センター 〒790 松山市一番町4-4-2 T E L0899 (41) 5645
F A X0899 (31) 8302
整理事務所 〒791-02温泉郡重信町田窪井口36-8 T E L0899 (64) 8438
F A X0899 (64) 8452

特集 古代「来島海人」の遺跡

—今治市糸大谷遺跡・馬島亀ヶ浦遺跡—

1. はじめに (表1)

来島大橋の建設に伴う一連の事前調査で、臨海性集落遺跡の発見・調査が相次いでいる。これらの遺跡は、瀬戸内海交通の要衝、来島海峡に棲み、積極的に海に働きかけた「海人」の遺跡である。

表1. 来島大橋関連調査遺跡一覧 (1991年10月現在)

遺跡名	所在地	調査区	面積㎡	調査経過
糸大谷	今治市砂場町	I~IV	11,000	I II 済
亀ヶ浦	馬島	I~VII	7,000	I II・VI 済
ハゼヶ浦	馬島	I~III	6,000	I 済
火内	越智郡吉海町	I~III	2,500	I~III 中

ここでは、糸大谷 I・II (1989年度調査 約5,000㎡) と亀ヶ浦 I (1990年度調査 約3,000㎡) について、未整理ながら調査の概要と成果の要点を紹介したい。

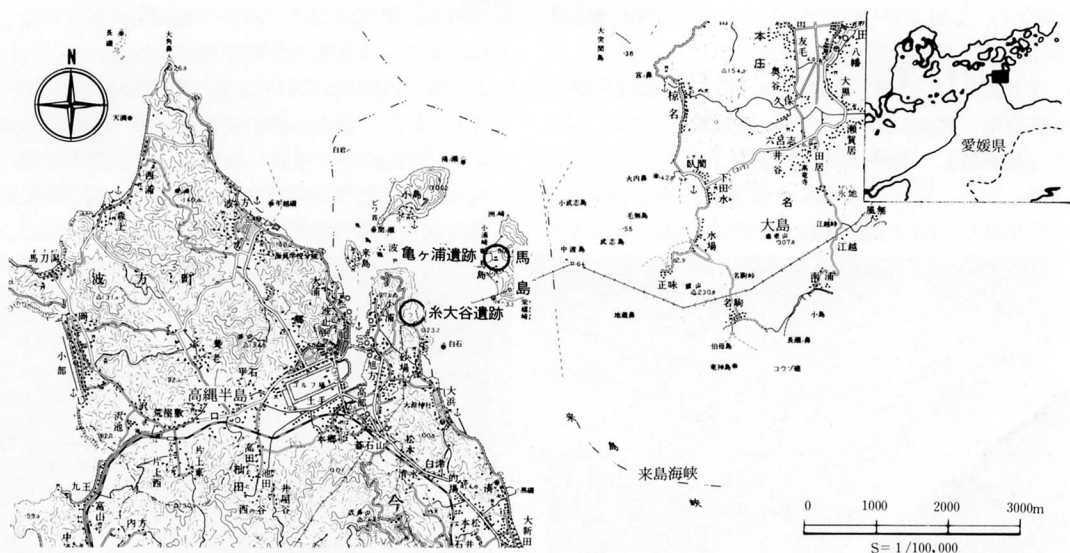
2. 立地と環境 (図1)

糸大谷遺跡は、高縄半島北側の小山塊、糸山の来島海峡(西水道)に面した狭長な谷斜面(標高 1.1~27.3m)に立地し、眼前(1.1km)には馬島が迫っている。ちなみに、近年、谷の上に道路が開設されるまで、当地の田畑には、もっぱら船で農耕に通っていたと言う。

一方、亀ヶ浦遺跡は、来島海峡の中央に浮かぶ馬島の西側海岸に形成された浜堤上(標高 -0.6~1.3m)を中心に立地する。亀ヶ浦遺跡は、背後に馬島最大の谷を控え、真夏でも水は滲み、小規模な集落経営には何ら支障ない。

来島海峡は、芸予諸島のなかでも、内海交通の重要な水路の一つであるが、潮流は速く(最速:10ノット)かつ複雑で、古来、瀬戸内屈指の難所でもある。

図1. 遺跡の位置



3. 糸大谷遺跡Ⅰ・Ⅱ区(糸大谷Ⅰ Ⅱ)(図2)

土層 谷に立地するため、自然流路が多数縦走り層序は複雑であるが、糸大谷Ⅱ例を模式的に解釈すると、上層から、①層(耕作土)、②層(流土)、③層<近世>、④層<平安>、⑤層<弥生中期～奈良>、⑥層(自然流路)、⑦層<縄文晩期～弥生前期>、⑧層<縄文後期>、⑨層(花崗岩盤)である。遺構は、各時代文化層の下面から検出したが、特に、⑥～⑨層上面から安定的に多数が検出された。

遺構 遺構は、竪穴住居(8≦)、掘立柱建物(4≦)、土坑(50)、溝・自然流路(51)、ピット(726)、土器溜り(3)である。竪穴住居の遺存は良くないが、現段階で、奈良期6棟以下、平安中期2棟以上である。掘立柱建物は、平安中期～中世3棟以上、近世1棟以上である。土坑は、縄文後期の石器製作坑が調査区北東に集中して検出された。この他、自然流路は、縄文後期→弥生中期～奈良→中世～近世へと、幅を減じながら谷の南側へ移行している。

遺物 遺構・包含層出土の主要遺物は下記である。

【土器】 縄文土器(擦消縄文、円帯文深・浅鉢、多孔底土器<後期前半>)、弥生土器(壺・甕<前・中期>、凹線文壺・甕・高坏<中期後半>)、土師器(壺・甕・高坏・鉢<弥生後期終末～古墳前期初頭・奈良>、内黒埴<平安>、皿<近世>)、須恵器(蓋坏・高坏・長頸壺・平瓶・提瓶・甕・甕<奈良>)、陶磁器(緑釉陶器碗<平安>、土瓶<近世>)、土師質土器(土鍋<中世>)、須恵質土器(捏鉢<平安>)、瓦器(埴<中世前半>)、染付(碗、皿、鉢、<近世>)…

【土製品】 土錘<古墳前期～中世>、製塩土器<弥生後期～古墳前期>、カマド<奈良>…

【石製品】 石錘、石斧、石鏃、スクレイパー、石棒、擦石、敲石、砥石、サヌカイト・黒曜石の剥片や原石<縄文後期～弥生中期>、砥石<奈良>…

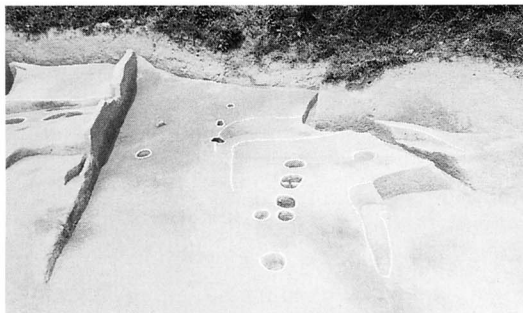


写真1. 糸大谷Ⅰの方型竪穴住居(奈良時代)

【金属品】 耳環、鉄刀子<奈良>、鉄鏃、鉄釘、鉄滓<奈良～中世>、三又鍬<近世>…

【木製品】 馬鍬?、竪臼、横槌、槌子<奈良>、曲物、箸、杭<平安>…

動態 糸大谷Ⅰ・Ⅱ遺跡は、縄文後期前半に入植以来、弥生後期、古墳前期、奈良、平安さらには、中・近世まで断続的に営まれた遺跡で、盛期は奈良期と平安中期である。遺跡の二大盛期の包含層からは土錘が多数出土しており、基本的には漁撈集落と考えられる。ただ、奈良期に限っては、十分な可耕地を想定できないにも係わらず、豊富な木製農具が出土し、農耕集落的な側面も考えられ、半農半漁集落と考えたい。

4. 亀ヶ浦遺跡Ⅰ区(亀ヶ浦Ⅰ)(図3)

層序 発掘区は、海岸砂浜+浜堤+後背湿地から成る。層序は上層から、①層(表土)、②層<近世>、③層<中世>、④層<弥生中期～奈良>、⑤層<縄文晩期後半～弥生前期>、⑥層(無遺物層)、⑦層<縄文後期前半>、⑧層(地山相当層)である。遺構は、⑤～⑧層から成り、縄文晩期以降に形成を完了した浜堤上で特に集中して検出された。

遺構 遺構は、竪穴住居(15)、掘立柱建物(2)、掘立柱建物(1)、土坑(40)、溝(8)、ピット(240)、土器溜り(3)、矢板列(1)、防波堤(1)である。竪穴住居は、弥生後期前半2棟、弥生後期終末～古墳時代初頭12棟、奈良期1棟で、平面プランは方形ないし長方形である。掘立柱建物は、浜堤中央を南北に指向し、弥生終末～古墳初頭の住居群に付帯する。

遺物 遺構・包含層出土の主要遺物は下記である。

【土器】 縄文土器(擦消縄文深・浅鉢<後期前半>)、刻目凸帯文深鉢<晩期後半>)、弥生土器(板付Ⅱ式壺・甕<前期前半>)、櫛描文壺<中期後半>)、凹線文壺・甕<中期末～後期前半>)、在地型甕<後



写真2. 亀ヶ浦Ⅰの住居群(弥生後期～古墳前期)

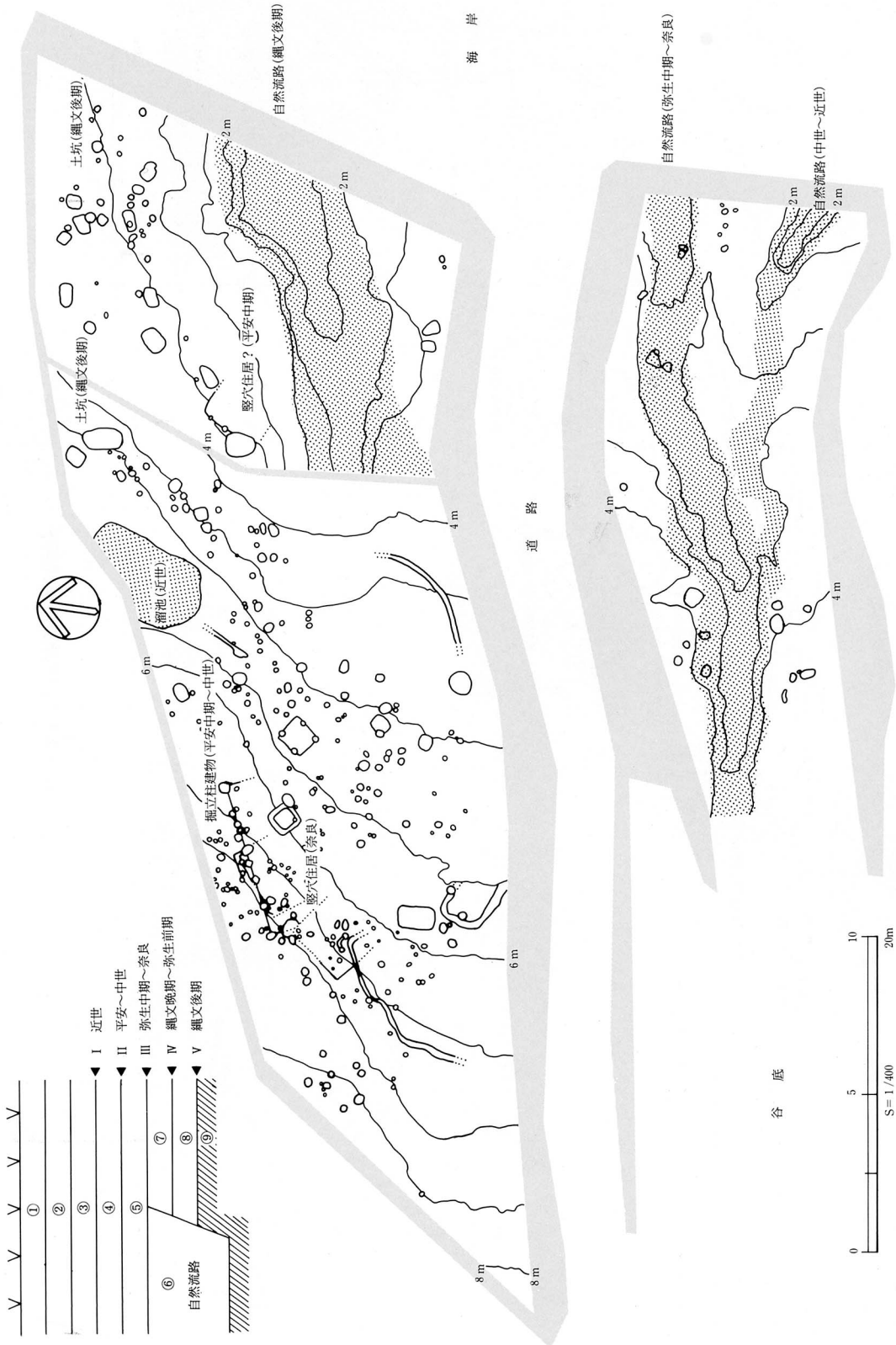


図2 糸大谷IIの遺構配置と模式層序



図3 亀ヶ浦Iの遺構配置と模式層序

期前半～後期終末)、複合口縁壺(後期終末)、土師器(壺・甕・高坏<古墳前期初頭・奈良>、皿<近世>)、須恵器(高坏・蓋坏<奈良>)、陶磁器(鍋蓮弁文青磁碗<中世>、長世三彩<近世後半>)、土師質土器(足付土鍋<中世>)、瓦質土器(罏釜)、染付(碗、皿<近世>)…

【土製品】 製塩土器(弥生後期終末～古墳前期)、土錘<古墳前期・近世>、布目瓦<古代>…

【石製品】 石錘、石鏃、スクレイパー、石錐、サヌカイトや黒曜石の剝片<縄文後期～弥生中期>、砥石<古墳前期>…

【金属品】 鉄釘<奈良>、銅製鋸<近世>…

【木製品】 箸、有孔円板、杭、板、丸太<近世>

動態 亀ヶ浦Iは、縄文後期前半に入植以来、縄文晩期後半、弥生全期、古墳前期、奈良、中・近世に至るまで断続的に営まれた遺跡である。遺跡の最盛期は、検出住居数から弥生後期終末～古墳前期初頭であった。この期、竪穴住居や土坑あるいは包含層から多数の製塩土器が出土しており、製塩遺構そのものこそ検出してないが、製塩集落と考えられる。

5. 調査の成果

縄文時代 糸大谷IIで石器製作に係わる縄文後期の土坑や周辺から製品に混じってサヌカイト(香川金山産?)や黒曜石(大分姫島産?)の剝片や原石が多量に出土した。特に、サヌカイト原石(26×16×8.5cm=2.99kg)は、内陸部の遺跡では検出されないサイズであり、本遺跡などの臨海性遺跡が、外来石材搬入の中継地的役割を果たしていたと考えられる。

この他、糸大谷IIの縄文自然流路(幅6.2～6.5m)は後期前半<中津式～彦崎KI式>の土器を多量に内包し、溝底是最下流(標高1.2m)でも、未だ海岸に到達しない。種類豊富かつ遺存良好な土器群は、当地の縄文土器編年に資する好資料であり、ま



写真3 糸大谷II出土のサヌカイト原石

た、流路の検出状況は、当地の海岸進退を理解する基礎データでもある。

弥生時代 亀ヶ浦Iから、板付II式土器が出土したが、弥生期の馬島に可耕地など想定できない。今、これら初期稲作資料から、農耕集落の存否を論ずるのでなく、稲作東遷ルートとして、来島海峡(四国北岸)が中継の要所であったことを重視したい。

中期の芸予諸島は、高地性集落の経営が盛行するが、亀ヶ浦Iでは、中期末～後期前半に長方形の竪穴住居が数棟営まれる。この時期、内陸部諸遺跡の住居形態は円形が通有であり、これら長方形の住居形態に、臨海性遺跡の特徴が見て取れる。

弥生後期終末になるとまとまって竪穴住居が営まれ、古墳時代前期まで集落経営が継続するが、この期の集落経営の原理は土器製塩であると考えられる。なお、亀ヶ浦I出土の製塩土器には数タイプあり、時期幅がある。今後、資料の類型化と編年検討から、亀ヶ浦Iを芸予諸島における製塩土器研究の標識遺跡としたい。

古墳時代 弥生後期終末から古墳時代前期は亀ヶ浦Iの最盛期であるが、当該期の製塩土器と土錘の量比を見ると、亀ヶ浦I=製塩土器>土錘、糸大谷I・II=製塩土器<土錘である。これを漁撈や製塩への生業依存率と看れば、当該期の亀ヶ浦Iは、製塩のための季節的集落であった可能性もある。芸予諸島では、古墳前期以降に製塩遺跡が急増し、製塩が高縄半島に蟠踞する県下最大の相の谷前方後円墳(全長82m)前期首長等の成立基盤の一つであったことは容易に想像され、亀ヶ浦Iの集落経営も高縄半島首長の動向として捉えられる。

古代 糸大谷I・IIのように、奈良期と平安中期にピークを迎える集落の消長パターンは、周辺の臨海性諸遺跡でも概ね共通する傾向である。これを安直に考えれば、律令体制の整備に伴い、諸官物等

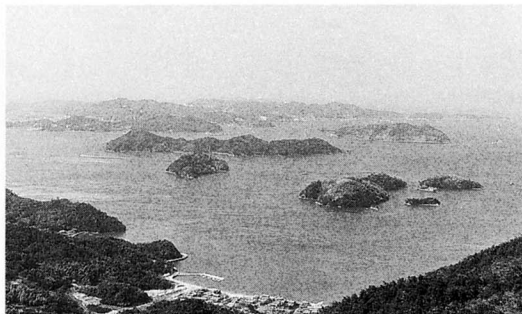


写真4. 大島亀老山から望む来島海峡

の海上輸送が頻繁となり、内海交通が活性化した結果であろう。ただ、文献資料に散見するように、高縄半島人の関与した重大事件(白村江の戦<663年>や天慶の乱<939年>)と遺跡の消長は符合し、国家の治安とも密接な関係にあるように思われる。ともあれ、両遺跡のような「浦」的集落の消長にこそ、瀬戸内の古代臨海集落の一典型を見い出せるのである。なお、亀ヶ浦Ⅰから布目瓦が多量に出土し、近接して特別な遺構の存在も注目される。

中世 近隣の島々(采島・中渡島・武士島など)で水軍城の築城が盛行するが、両遺跡で当該期の明確な遺構は未確認で、意外にも中世は不在である。

近世 糸大谷Ⅱの溜池や亀ヶ浦Ⅰの掘立柱建物・矢板列・防波堤の存在から、小集落の経営が看取られる。今治藩は、元禄期以降に島嶼部の新田・塩田開発を振興するが、両遺跡にもその余波が及んだものと考えられる。

6. おわりに (図4)

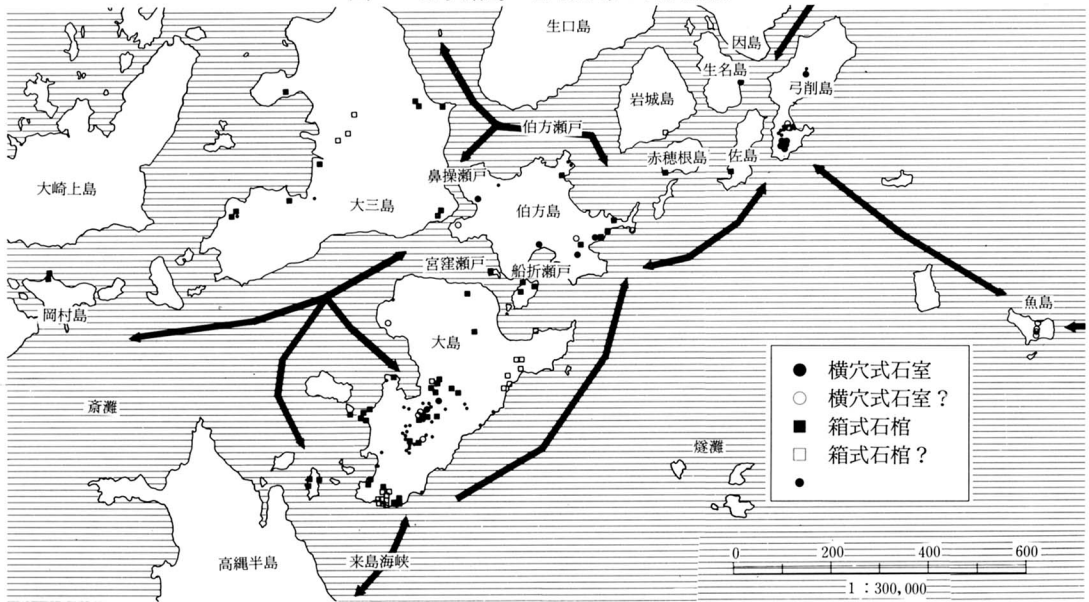
以上、糸大谷遺跡や亀ヶ浦遺跡は、海を臨む生業(漁撈や製塩)を生活の基軸とする集落であったと同時に、陸上交通の未発達な古代において、西国と

畿内を結ぶ内海交通の要衝、来島海峡を拠点として、東西(あるいは南北)の文物を直接担い、内海文化交流に大きく寄与した「来島海人」の遺跡であった。

今後、本格的な資料の分析・検討を経て、当地の臨海性遺跡の特異性を抽出し、その歴史的意義を評価したい。

最後に、こうした海人の動きが、芸予諸島の古墳分布からも看取られるのでここで触れておきたい。芸予諸島の古墳の多くは箱式石棺墳であるが、6世紀後半以降になると横穴式石室墳が造営されるようになる。特に集中的に分布するのは、大島津倉湾岸の八幡地区、伯方島の木浦地区、弓削島の日比地区周辺であり、地理的にもそれぞれ当時の拠点の港津であったと推察される。このような後期横穴式石室墳の分布から、少なくとも6世紀後半に、内海航路の一つとして、高縄半島—大島—伯方島—弓削島—魚島—備讃瀬戸—畿内を結ぶ、芸予諸島南辺のルートが成立していたと考えられる。そして、このルートこそ、高縄半島勢力が畿内勢力と交渉する上で重要な航路であった。高縄半島勢力と密接な関係にあったと考えられる来島海人も当該ルートを利用して勇躍していたのであろう。

図4 芸予諸島の古墳分布と古代航路



編集後記

今秋、愛媛県は台風19号の通過で、特に臨海地域が甚大な被害を被った。発掘現場も例外ではなく、職員も事後処理に大わらわだった。今回は臨海性遺跡の特集であったが、両遺跡とも防災の未発達な古代には、自然の猛威に幾度も直面したに違いない。本特集は、こうした過酷な生活条件の中で逞しく生きた海人に、はじめて考古学の視点を向けたものであるが、今後、諸兄のご指導、ご助言をお願いしたい。